

京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績、業績

——第一報 京都大学整形外科学教室の創立

廣 谷 速 人

島根医科大学名誉教授

〔要旨〕 京都帝国大学京都医科大学整形外科学講座は、明治三九（一九〇六）年四月二三日の勅令八九号によつて設立され、同年五月四日に外科学教室浅原慎次郎助教授が最初の整形外科学教室担任に任命された。これより先、明治三四年三月に東京帝国大学医科大学助手から京都帝国大学医科大学の助教授に任命され、翌明治三五年から矯正外科学研究のためドイツへ留学していた松岡道治は、明治三九年五月一三日に帰国し、同年五月二三日に整形外科学講座担任を命じられて、浅原助教授とその任を交代した。かれは、明治三九年六月一八日に、本邦初の整形外科学教室である京都医科大学整形外科学講座を開設し、診療と講義を開始した。松岡は明治四〇年に教授に昇任した。かれは、幾多の困難に打ち勝つて、わが国では従来見なかつた整形外科学教室を初めて設立し、明治後期のわが国整形外科学黎明期にその基礎を築き、発展に大きく寄与した。

キーワード——松岡道治、整形外科学、京都大学医学部、京都帝国大学

第一章 はじめに

京都帝国大学医科⁽¹⁾大学整形外科学講座（現・京都大学大学院医学研究科感覚運動系外科学講座整形外科学）は、明治三九（一九〇六）年勅令八九号⁽²⁾によって同年四月二三日に創立されているので、平成一八（二〇〇六）年には開講百周年を迎える。

講座の実質的な初代担当は松岡道治助教であるが、このような節目のときをひかえ、第一報として、従来必ずしも明白でなかった講座創立前後の経緯を、当時講座が置かれていた京都医科大学内外の状況とともに調査、検証し、明治後期における本邦整形外科学黎明期の一端を明らかにする。

第二章 京都大学整形外科学教室の創立

第一節 創立前史

東京・京都両帝国大学医科^(3,4)大学に整形外科学講座を創設しようという機運は、明治三二・三三年ごろに醸成されてきたという。そこで東京帝国大学医科^(3,4)大学外科学講座助手の松岡道治先生（以下敬称略）が、京都帝国大学医科^(3,4)大学整形外科学講座の教授予定者として、明治三四年三月三〇日に京都医科^(3,4)大学外科学助教に任命された。松岡助教^(5,6)の着任当時の京都医科^(3,4)大学外科学講座では、猪子止戈之助⁽⁷⁾第一外科学教授は同年二月に、先任の和辻春次助教⁽⁸⁾も同年三月半ばに、それぞれドイツへ留学したので、松岡助教^(5,6)は、伊藤隼三教授⁽⁹⁾に次ぐ重要な地位を外科学教室で占めたことになる。

明治三四年九月、すなわち松岡助教^(5,6)の着任後半年、矯正外科学研究のためドイツへ留学する一年前、京都医科^(3,4)大学附属医院開院後二年目における外来診療担当表⁽¹⁰⁾をみると、外科外来は第二外科学講座伊藤隼三教授⁽⁹⁾（当時附属

医院院長)が週二回(火・土曜日)、松岡助教授が週四回(月・水・木・金曜日)担当している。

当時の附属医院での外来患者受付は午前七時半から九時まで、診察時間は午前八時から午後一時までであった。内科は三五名まで、外科は四〇名まで、産科婦人科は一七名まで、診察す¹¹⁾と書かれている。しかし、一般外来は九時半から十時半まで、施療外来は月・水・金曜の午後一時から二時まで¹²⁾に制限したとの記載もある。

また、この直前の「暑中休暇(八月)中¹³⁾は、内・外科ともに二〇名の新患者(私費に限る)を診察するのとこのであった。さらに明治三七年初頭の附属医院冬季休業は、「旧臘二五日より一月二十日迄で、医院は在院患者のみにて新患者の外来、入院共取扱はず、助手のみにて院務に当らし¹⁴⁾」めるとしている。

ちなみにそのころの「附属医院規程」¹⁵⁾によれば、「本院ハ医学ノ研究及授業ノ目的ヲ以テ患者ヲ診療」し、「入院患者ハ施療ヲ主トシ傍ラ私費入院ヲ許可スルモノト」されていた。

明治三七年一月には、伊藤隼三院長は次の「通訓」を出している。¹⁶⁾すなわち、(1)言葉遣い叮嚀にして同等以上の人に対する語を用うるを要す(従来官衛の風としての「其方、そち、きさま」ではなく、自今はすべて「あなた」と呼ぶこと)、(2)尋問(質問)に応ずるには懇切詳細なるを要す。(3)不自由者(身体、聴・視覚の不自由者、文盲)に対しては殊に補助の心掛あるを要す。(4)容儀(服装、立ち居振る舞い)は正しきを要す。この「通訓」は、このよう指示を示さざるを得なかつた当時の「帝国大学医院」の体質を如実に物語る証拠であるとともに、今日なお、医療従業者に十分当てはまることでもある。

第二節 京都医科大学整形外科学講座の創立

京都帝国大学京都医科大学において、整形外科学という講座名がはじめて登場するのは、上述の勅令第八九号¹⁷⁾である。そこには「外科学二講座」ノ次ニ「整形外科学一講座」ヲ加へ」と明記されている。

これを受けて京都帝国大学は、明治三十九年五月四日に浅原慎次郎第二外科学講座助教を京都医科大学整形外科学講座担当とした。⁽¹⁸⁾ 松岡助教は同月一三日にドイツ留学から帰朝し、五月二三日には「整形外科学講座担当」を命じられてその任を浅原助教と交代した。⁽¹⁹⁾ その後松岡助教は、同年六月二三日には「整形外科学講座及第九病舎整形外科部所属ノ物品監守主任」に、同年六月二六日には「京都医科大学整形外科学教室主任」「同教室図書保管者」に、相次いで任じられている。^(20, 21, 22)

かくして京都医科大学整形外科学講座は、松岡道治助教によって、全国にさきがけて、名実ともにわが国初の医科大学整形外科学教室として発足し、講義、診療を開始したのである。

なお東京帝国大学医科大学では、明治三十三年八月、田代義徳医学士（東京田代病院院長）⁽²⁰⁾ を外科的矯正術研究のため独塊へ留学させた。⁽²¹⁾ 明治三十九年四月四日公布の勅令六八号⁽²²⁾ によって東京帝国大学医科大学に整形外科学講座が創立され、同五月九日に整形外科学講座教授に田代外科学助教が任命されたが、その開講は同年一〇月一日であった。⁽²³⁾

第三節 整形外科学講座の創立日および開講日

京都帝国大学京都医科大学整形外科学講座の創立日は、勅令八九号⁽²⁴⁾ が公布された明治三十九年四月二三日であることは、前述のように、明白である。

しかし教室の診療・講義開始日については、従来明治三十九年の六月（『京都帝国大学史』⁽³⁾、『京都大学七十年史』⁽²⁵⁾）、五月二三日（『京都大学百年史』⁽¹⁾）、あるいは六月二六日（松岡助教整形外科学講座主任任命の月日⁽²⁶⁾）と、さまざまに記述されてきた。

一方松岡助教自身は、講座創立一カ月後の明治四〇年五月に開催された京都医学会第四次総会の口演で、「余

ハ昨年六月一八日京都医科大学ニ整形外科ノ講座ヲ担当シ」と明確に述べている。⁽²⁵⁾ 当時の新聞や医学雑誌の記事がこの記述を裏書きしていることから、京都医科大学整形外科学講座の開講日は明治三十九年六月一八日であると断定することが出来る。

第四節 整形外科学の授業、試問

京都医科大学は、整形外科学講座開設を受けて明治三十九年八月に規程を改定し、「授業科目」に「整形外科学臨床講義」を、「試問」に「整形外科学」をそれぞれ加えた。⁽²⁷⁾ 『京都帝国大学一覽 從明治三十九年 至明治四〇年』⁽²⁸⁾ 記載の「授業、試問」の規程によれば、「整形外科学臨床講義」は、第四学年（最上級年）の全学期を通じて週一回行くと規定された。しかし「試問」は、小兒科学、皮膚病微生物学、耳鼻咽喉科学、精神科学とともに、「学生ノ要求ニ依リ之ヲ施行ス」となっている。

「学生ノ要求ニ依」る試問とは、これらの五学科目のうちから一学科を学生が選択して申し出て、その学科を受験すればよかつたのではないかと考えられる。当時学生であつた伊藤弘京都大学名誉教授は、「自由学科で試験も何もない」と回想している。⁽²⁹⁾

一方その頃の東京帝国大学医科大学では、第三学年で「整形外科外来患者臨床講義」が年間週三時間行われていたものの、その「試験細則」に、「整形外科学」の文字は見当たらない。⁽³¹⁾

第五節 整形外科学教室の建設

明治四〇年当時の京都医科大学付属医院建物配置図を見ると、⁽³²⁾ 医院敷地の南側を東西に走る春日通に面して二階建ての本館があり、整形外科学教室は、正門を入ってすぐ西側、本館南西前に独立した平屋の建物として描かれて

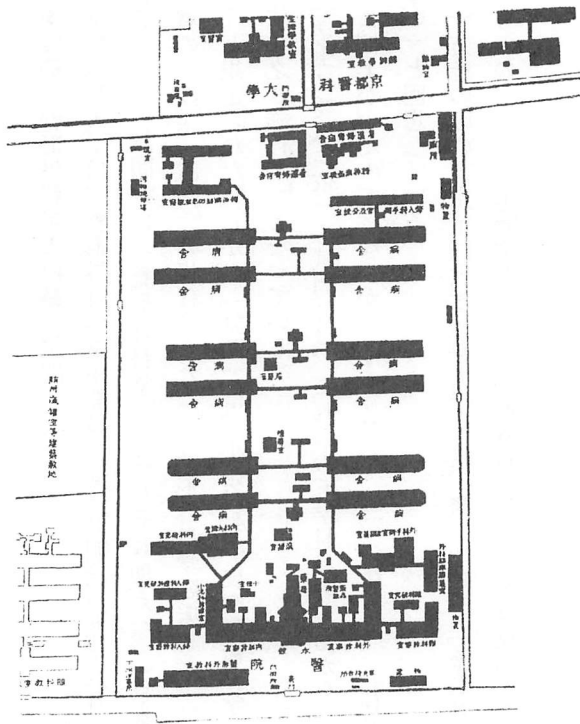


図1 京都帝国大学平面図⁽³⁴⁾

いる（図1）。この整形外科学教室（研究室）は明治四一年に建設されたもので、明治三四年に本館東端北側に造られた外科学教室（手術室及外科教室）と外科臨床講義室の二棟⁽³²⁾とはまったく離れた別の場所に造られていた。当時の新聞記事によれば、木造二階建、建坪百坪（三三〇平方メートル）であったという。

なお教室開講以後、研究室完成までの間の整形外科学教室・研究室の所在は明確ではない。医院開院当時には、本部棟の二階に内・外科学教室が置かれていたという記録があるので、外科学教室が自前の建物（研究室）を建設（明治三四年）⁽³²⁾して移転した後に、そこへ新設の整形外科学教室が入居したものと考えられる。

整形外科の外來診療が行われた場所

表1 京都医科大学附属医院入院患者数(松岡教授在任中)*

	整形外科	外科	入院患者総数
明治40年	14 (3)	85 (38)	360 (153)
明治41年	19 (5)	86 (48)	361 (170)
明治42年	14 (1)	84 (44)	348 (174)
明治43年	13 (7)	65 (37)	319 (173)
明治44年	25 (21)	101 (46)	394 (212)
明治45年	28 (26)	75 (48)	402 (259)
大正2年	44 (40)	91 (60)	434 (295)
大正3年	37 (22)	96 (68)	481 (322)

* 各年度の『京都帝国大学一覽』の「概況 京都医科大学附属医院」による。括弧内は私費患者。

ちなみに各年度の『東京帝国大学一覽』『医科大学附属医院』の欄によれば、整形外科入院患者数は、明治40・41年は10名(総病床数は611床)であり、明治42年から大正2年にかけては17名(同660床)、大正3年は17名(同680床)であった。

に関する資料は目下見出し得ない。しかし、本館棟東側の北へ延びる部分に、試験室、診察室、副診室、予診室、患者溜(これらはいずれも二室)と、手術室、器械室、包帯室などが建設当初から配置されていたこと(36)から、これらの部屋を外科学講座と共用したものと推察される。

つぎに病室について述べる。松岡教授の履歴書(37)によれば、始め(明治三九年六月)第九病舎、ついで(明治四〇年五月)第七病舎、さらに(明治四三年)第一病舎のそれぞれ「整形外科所属物品監守主任」を命じられている。

当時の普通病舎は、ドイツのハンブルグ大学に範をとったパビリオン式に則って設計、建築された(38)。すなわち医院本館の北側に平屋で東西二棟(東側は奇数、西側は偶数の病舎番号と呼ばれた(36))が対称的に順次北へ建てられ、渡り廊下によって連結されていた。当時の普通病舎一棟のベッド数は六〇床、その構造は当時として極めて斬新なものであった(36)。

教室開設以降の『京都帝国大学一覽』を見ると、整形外科の入院患者数は一病舎の定員(六〇名)を埋めるに至っていない(表1)ので、他科、しかも内科系病舎の一部を

使用していたものと推定される。

第二章 講座創立の苦悩

第一節 病床の確保

まず、整形外科病床に関する他大学の事情を述べる。

東京帝国大医科大学附属医院では、田代義徳教授が整形外科学教室を開設するにあたって、教場（教授室、医局、研究室、病室、ギブス室、処置室など）として、同級で親友、支持者であった入沢達吉教授が主宰する、いわゆる入沢内科の病室の一部をゆずりうけた。^(20, 21) しかも病床数は、表一に注記したように、すくなくとも開設数年間は、病床数は一定であった。なお外来診療所は剣道場の跡の建物であったという。⁽²²⁾

一方、福岡県立病院を充用して発足した九州帝国大医科大学附属医院でも、大正二年に整形外科の診療開始にさいして建築予算がなく、住田正男教授は附属医院の空床二床を借りて教室としたものの、入院病棟は当初はなかつたといわれている。⁽²³⁾

京都医科大学附属医院開院後七年にして新設された整形外科学講座が、独立した整形外科病舎を持つだけの入院患者数を擁するには、相当な歳月を必要とした。そのこともあつてか、上述のように内科系病舎を転々と移動せざるを得なかつたようである。東京・九州両帝国大とは異なつて、京都医科大学附属医院はまったく新しく建築されてものであつたが、他の帝国大学の整形外科学教室と同様に開院後に新設された講座であつたためか、同様な産みの苦しみを経験したものと考えられる。

表2 京都医科大学整形外科学講座職員数*
(カギ括弧内の数字は第一・第二外科学講座職員数の合計数)

	教授	助教授	助手	副手†	合計
明治40年	0 [2]	1 [2]	1 [4]	0 [2]	2 [10]
明治41年	1 [2]	0 [2]	1 [2]	0 [1]	2 [7]
明治42年	1 [2]	0 [2]	1 [6]	1 [12]	3 [22]
明治43年	1 [2]	0 [2]	1 [1]	0 [9]	2 [14]
明治44年	1 [2]	0 [2]	1 [3]	0 [18]	2 [25]
明治45年	1 [2]	0 [2]	2 [2]	0 [16]	3 [22]
大正2年	1 [2]	(1) [‡] [2]	1 [4]	0 [13]	3 [21]
大正3年	0 [§] [2]	(1) [‡] [3]	1 [4]	0 [13]	2 [22]

*明治40年から大正3年までの「京都帝国大学一覧」「京都医科大学 職員」による。

†副手は無給。[‡]講師。[§]外科学講座2教授による分担

第二節 講座職員の定員

東京帝国大学医科大学では教授一、助手一の職員で整形外科学講座が発足したが、京都医科大学整形外科学講座の職員は、はじめ助教授一、助手一であった。⁽⁹⁾次年度以降教授一、助手一になっているもの、助手が二名となったのは明治四五年だけであった。そして助手、副手は毎年のように交代し、明治四二年に林喜作が助手に任命されるまで、定着する教室員はいなかったといわれている。松岡教授在籍中の職員数は表2に示すとおりである。

京都医科大学の^(3, 13)外科学二講座は、発足当時から一体に融合して運営されていて、整形外科学講座が発足した後は、^(3, 13)外科学教室の教室員は一学期間整形外科学教室に所属する制度になっていた。この制度はそれなりに有効に機能したようであるが、整形外科学講座の立場からすれば、人事の主導権を外科学二講座側に掌握されることになった。さらに診療面においても、⁽³⁾直接整形外科を受診できるシステムではなかったという指摘もある。これらのことから、当時の整形外科学教室は外科学教室の分科的存在にならざるを得ない立場に置かれた。

第三節 外科学講座からの学会発表

このことを傍証するものひとつとして、明治四一年から四三年頃の日本外科学会総会での演題や日本外科学会雑誌の論文発表を⁽¹⁾挙げる事ができる。

また、伊藤隼三第二外科学教授が『東京医事新誌』誌上へ明治三四年一〇月二五日（一二二八号）から大正一〇年一月一日（二二〇九号）まで断続的に連載した「京都医科大学外科臨床講義」では、整形外科学講座発足（明治三九年六月）までの一三〇編中、整形外科疾患の標題が四〇編（三二パーセント）であったのになし、明治三九年七月以降の演題でも整形外科的疾患は六九編中二編（三〇パーセント）を数え、両者の百分率に差はない。

第三節 まとめ

京都医科大学整形外科学教室の発足後一ヶ月目における現状報告ともいべき上述の京都医学会第四次総会での口演⁽²⁾の冒頭で、松岡助教授は「新シキ学科ヲ僅カノ経費ヲ以テ、従来設置ヲ見ザル国ニ創立スルニハ多大ノ困難ニ遭遇スルモノナリ」と記している。

さらに内藤一男・元松岡病院院長が紹介した『松岡矯正科及外科病院医報』（大正二五年）の記述⁽³⁾によれば、松岡院長は「一九〇六年京都大学において矯正外科学教授となり、また、群論を排して内科外科のごとき分科と等しく独立医学科たらしめ学生必修の科目に編入したるは、実にわが国における最初の「オルトペデー」なりとす」と記しているという。

松岡教授の教室創設時の自負と心労に加えて、上述の教室の弱い立場などのために、外科学両講座の先輩教授との間に微妙な亀裂が生じたであろうことは想像に難くない。松岡教授のこの心情は、在任中は言うに及ばず、退官後も長く深く、尾を引いていたと考えられる。

第四章 むすび

本邦初の整形外科学講座である京都帝国大学京都医科大学整形外科学講座を創立した松岡道治教授の軌跡を検証するために、当時公刊された資料や記録を調査して、講座創立にいたる経緯、創立当時の教室の状況について、他の講座や東京・九州帝国大学の場合とも比較して、明らかにすることができた。それらによって、整形外科学がまだ十分認知されていない時代における松岡教授の活動の一端を知ることができた。

注記と引用文献

(1) 明治三二年九月に開設された「京都帝国大学医科大学」は、明治三六年に京都帝国大学福岡医科大学が新設されたため「京都帝国大学京都医科大学」となり、明治四四年に京都帝国大学福岡医科大学が九州帝国大学医科大学として分離したために、ふたたび「京都帝国大学医科大学」とし、その名称を変えた。さらに大正八年には「京都帝国大学医学部」、昭和二二年九月に「京都大学医学部」、昭和二四年四月には「(新制) 京都大学医学部」となった。

創立以来の整形外科学講座という教室名は、平成七年四月「京都大学大学院感覚運動系病態学講座筋・骨格系病態学(旧整形外科学講座)」^②、さらに平成一〇年四月には「京都大学大学院医学研究科感覚運動系外科学講座整形外科学」と改称された(私信、「京都大学整形外科学教室、平成一六年一月二四日、同二六日」)。

①「2. 主な出来事の年表(第七章 大学院医学研究科・医学部、医学部附属病院 第一節 総記 第一項 沿革)」
 京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史 部局史編一』京都大学後援会、六八一～六八三頁、平成九年。②「6. 感覚運動系病態学講座筋・骨格系病態学(旧整形外科学講座)(第七章 大学院医学研究科・医学部、医学部附属病院 第二節 講座等 第七項 外科系)」文献(1①) 八七四～九一七頁

(2) 勅令第八九号(明治三六年勅令第六八号改正、明治三九年四月二三日公布)『官報』 六八四二号、七二一頁、明治三九年四月二四日発行

- (3) 「一六 整形外科学教室(第二編 学部及研究所 第二章 医学部 第三節 学術)」京都帝国大学編『京都帝国大学史』三四九～三四頁、京都帝国大学、昭和一八年
- (4) 近藤鏡矢「医学部整形外科学教室の事ども」京都大学創立九十周年記念協力出版委員会編『京大史記』四〇頁、京都大学創立九十周年記念協力出版委員会、昭和六三年
- (5) 内藤一男「松岡道治先生の思い出」京都大学医学部整形外科学教室編『京都大学医学部整形外科学教室 開講八〇周年記念誌』六～一五頁、京都大学医学部整形外科学教室、昭和六一年
- (6) 「松岡道治履歴書」内藤一男元松岡病院院長が天兒民和九州大学名誉教授へ送付した資料(小林晶、私信、平成一五年一月一四日)
- (7) 猪子止戈之助(いのこ・しかのすけ) 明治一五年帝国大学卒業。ただちに京都府療病院外科部長・府医学校(現・京都府立医科大学)教諭、明治二〇年に校長、明治二五年から二カ年間欧州への留学を命じられた。京都医科大学開設にさいしてはその設計委員を勤め、明治三二年七月の京都医科大学開設とともに第一外科学講座教授、附属医院院長に就任した。明治三四年二月、院長を辞してドイツへ二カ年留学し、大正一〇年に定年退官した。
- ① 荒木千里「わが邦外科学の泰斗猪子止戈之助博士逝去」『大手術の開祖』一一一四号、昭和一九年。
- ② 「第一節 創立前記(第二編 学術及研究所 第二章 医学部) 文献(3) 二四一～二四二頁。③ 「(5) 部局長〔医科大学附属医院、医学部附属医院〕、医学部附属病院」(第四編 主要人事一覽・統計 主要人事一覽)」「京都大学百年史 資料編 三」一六一頁、平成一三年。
- ④ 「雑報 猪子博士」『京都医事衛生誌』八三号、明治三四年。
- ⑤ 「(7) 教員(医科大学、医学部、医学研究科)」(第四編 主要人事一覽・統計 4. 主要人事一覽〔医科大学、医学部、医学研究科〕) 文献二二八～二四五頁
- (8) 和辻春次 明治二二年に帝国大学を卒業し、東京帝国大学医科大学外科学講座助手を経て、明治二七年七月から同三一年二月まで市立新潟病院(現・新潟大学医学部)外科医長、明治三一年二月から明治三三年五月まで台湾総督府医院医長、外科部主任を勤め、明治三四年六月に京都医科大学外科学講座初の助教授に任じられた。翌明治三五三月耳鼻咽喉科学研究のため、助教授の身分のままドイツへ留学した。その直後に松岡助教授が着任しているので、この時点で外科学

講座の助教は定員上二名となつたわけである。和辻助教は明治三八年に帰国して、耳鼻咽喉科学教室を創設した。⁽⁹⁾

①「市立新潟病院」新潟大学医学部五十周年記念会『新潟大学医学部五十年史』二五四～二五七頁、昭和三七年
②「沿革」『台北医院 第三〇周年報 昭和元年』台北医院、二頁、昭和二年。③文献(7⑤) 二四五頁。④「日誌」

『医事新聞』五八七号、五六八頁、明治三四年。⑤「耳鼻咽喉科学講座」文献(1①) 八八一～八八四頁。

(9) 伊藤隼三 明治三三年帝国大学卒業。同二七年札幌区立札幌病院院長となり、三年間のドイツ留学の後、明治三三年に京都医科大学第二外科科学講座教授に任命された。^(7,3) 明治三四年から大正四年まで附属医院院長、大正四年医科大学長(大正八年、医学部長)を務め、大正一三年定年退官した。^(7,3)

①「札幌病院(Ⅱ・医学部設置の背景 2. 医療のひろがり)」北大医学部五十年史編纂委員会編『北大医学部五十年史』五三～五五頁、北海道大学創立五十周年記念会館建設期成会 昭和四九年。なお(札幌区立)札幌病院は明治四(一八七一)年に創設され、現在の市立札幌病院に至っている。②「外科 伊藤隼三・鳥潟隆三」井関九郎『批判研究 博士人物 医科編』三〇〇～三〇一頁 発展社出版部 大正一四年

(10)「雑報 大学医院開院」『京都医事衛生誌』一四三号、五二五～五二六頁、明治三二年。開院に先立つ明治三二年一月一八日には、縦覧(内見会)が行われ、大谷派新法主、在京各官衛高等官、貴衆両院議員、府市郡会議員から市内及近郡の紳士まで、三百余名が参集し本館二階で茶菓の接待を受けたと言う。⁽¹⁾ 同月一日には京都帝国大学学生、同二〇日には京都医学会会員、京都府医学学校校友会会員、京都医会、衛生会会員ら、同二日から三日には一般公衆に、それぞれ附属医院を公開している。^(2,3)

なお開院一カ月後の地元新聞記事によれば、外来患者数は開院当日で二一人、その後一カ月の最高は一日七九名であった。明治三二年二月二八日現在の入院患者数は内科七名、外科六名であるが、その間大阪府あるいは香川県からも来院しており、さらに外人二名(第三高等学校教師のドイツ人、同志社教師のイギリス人)が入院したという。

①「医科大学の縦覧」『京都日出新聞』四五七号、一頁、明治三二年一月一九日発行。②「大学医院開院」『京都医事衛生誌』一四三号、五二五～五二六頁、明治三二年。③「大学医院の公衆縦覧」文献(10①)、一頁。

(11)「雑報 京都医科大学附属医院」『京都医事衛生誌』九〇号、九頁、明治三四年

なお、松岡助教留学後の明治三六年には、伊藤教授が月・水・金曜日に、他の曜日は助手が外科外来を担当することになっていた。^①

①「雑報 京都医科大学附属医院」『京都医事衛生誌』一一三号、一六〇一七頁、明治三六年

(12)「医専と医学校教諭・卒業生の人物像（第八篇 明治時代の医学と医療・第四章 府立病院の設置 第三節 療病院から甲種医学校へ）」京都府医師会医学史編纂室『京都の医学史』京都府医師会・八七一頁、昭和五五年

(13)「雑報 暑中の大学医院」『京都医事衛生誌』一〇〇号、二五頁、明治三五年

(14)「雑報 京都医科大学」『京都医事衛生誌』一一八号、一三頁、明治三七年

(15)「第七 附属医院規程 第四章 医科大学」京都帝国大学『京都帝国大学一覽 従明治三三年 自明治三四年』京都帝国大学、九二、九三頁、明治三四年

(16)「雑報 京都医科大学附属医院の応接振」『京都医事衛生誌』一一九号、二二二、二四頁、明治三七年

(17)浅原慎次郎 明治四年三月二六日生まれ。^①明治二七年三月、第一高等中学校医学部（現・千葉大学医学部）を卒業した、

玉置哲也、私信、平成二六年一〇月九日。村田保の次男で、当時の住所は東京市麹町（現・千代田区）富士見町二丁目

四四番地。卒業後半年間病院勤務し、同年七月渡米して「バルチモアー市」大学で婦人科及び外科を修め（一四カ月）、

ドクトル オフ、メヂシアン（バルチモアー、メヂカル カレッジ）を授与された。明治二九年一月から約一カ年英国

ロンドンのセレント、トーマス病院において外科婦人科を専攻した後、さらにドイツ・ベルリン大学(Friedrich-Wilhelms-

Universität)で外科を学んでドクトル、メヂチ子(ベルリン大学)を得て(學位論文「淋毒転移」二就テ)帰国した。

明治三二年京都市東山医院(院長・半井澄)京都市内の私立病院ではじめて外科部を開設した(1)の外科部長に就任。明

治三三年医業開業試験委員に任命された。明治三五年七月、京都市内で開業した(私立京都外科医院)。

浅原は京都では市民ならびに京都医学界で高い評価を受けるとともに、京都医科大学外科学講座の伊藤隼三教授のもとで研鑽を続け、邦文、独文の論文を多数発表した。明治三七年六月二日京都医科大学外科学助教授に就任し、同年八月四日医学博士(京都帝国大学)を授与された。明治四二年九月、助教授を辞し鹿兒島県病院へ院長として赴任した。明治四五年日本泌尿器病学会(昭和三年日本泌尿器科学会と改称)創設に際して同会発起人のひとりとなった。^②

大正二年一月に院長を辞任して、開業の傍ら東京京橋区木挽町(現・中央区銀座三丁目)の池田病院に新設された外科部長兼顧問に就任し、住居を東京へ移した。その後東京市芝(現・千代田区)高輪町五二へ移り、昭和一二年の『日本医事年鑑』⁽²⁾では渋谷区円山町で内科を開業、同書の「医学博士録」⁽²⁾での自宅住所は渋谷区桜ヶ丘一九になっている。昭和一三年の『日本医事年鑑』には昭和一二年五月死去したとの記録がある。

① Asahara Shinjuro 『Ueber Metastase der Gonorrhoe』 E. Eberings, Berlin, 1898. (邦訳は「淋毒転移二就テ」と題して『中外医事新報』[四四〇号、九三五〜九五一頁、明治三二年]へ公表)。本論文は表紙、裏表紙を含めて四四頁、たて二センチメートル、よこ一四センチメートルの小冊子で、ベルリン大学での学位を取得するためにドイツで自家出版したものである。冒頭に六〇歳を迎えた父と、母への献詞があり、巻末に履歴が印刷されている。本論文の討論者三名のなかに、岡田和一郎の名がある。岡田は『帝国大学一覽 従明治二八年 至明治二九年』(九九頁、明治二九年)に外科学助教授として名がみえる。後に東京帝国大学医科大学耳鼻咽喉科学講座を創設し、退官後名誉教授となり、昭和医学専門学校(現・昭和大学医学部)校長を務めた。② 「元第一高等中学校 第六回卒業生 (第七 医学科卒業生徒姓名)」第一高等学校『第一高等中学校医学部一覽 従明治二六年 至明治二七年』五八頁、第一高等中学校医学部、千葉県千葉郡千葉町、明治二七年。③ 村田保 唐津市のホームページ「郷土の先駆者」(http://www.karatsu-city.jp/sightseeing.php?id=b_no_16.php 平成一七年三月三十一日現在)によれば、天保二二(一八四二)年唐津藩士の長男として大坂に生まれ、幼少時浅原家から村田家の養子に入った。明治新政府の高官として法整備を行うとともに法律書を多数著わした(慶応義塾村田保文庫)。また、わが国の水産業の発展と大日本水産伝習所(現・東京海洋大学)の設立に尽力した。明治三三年、貴族院議員に勅選され、明治三九年、(旧)勲一等瑞宝章受勲。大正一四(一九二五)年没。④ 「雑報」ドクトル浅原慎二郎氏』『中外医事新報』四四〇号、三〇頁、明治三一年。⑤ 「雑録 特別会員宿所名」『高志林』第七号、五五〜六五頁、第一高等学校医学部学生会、千葉県千葉郡千葉町、明治三〇年。⑥ 「消息」『一高志林』第二号、九頁、明治二八年。⑦ 「消息」『一高志林』第三号、一頁、明治二九年。⑧ 浅原慎二郎「淋毒症転移二就テ」『中外医事新報』四四〇号、九三五〜九五一頁、明治三一年。⑨ 「会員動静」『一高志林』第一〇号、五一頁、明治三一年。⑩ 藤田俊夫・半井英江「秋山 半井 澄(一八四七—一八九八) —

- 京都府療病院長・医学校長・医師会創始者」『日本医史学雑誌』四六卷、四四二～四四三頁、平成二年。⑪「雑報 地方 京都通信 病院近況」『医海時報』二四四号、九四頁、明治三二年。⑫「人事彙報 浅原氏」『東京医事新誌』一〇八三・四号、六二頁、明治三一年。⑬「雑報 東山医院外科部長」『京都医事衛生誌』七五号、三二頁、明治三三年。⑭菅野弘一「明治三十五年ニ於ケル京都ノ医事衛生」『京都医事衛生誌』七八号、一三七〇頁、明治四二年。⑮「雑報 学位授与」『京都医事衛生誌』一二五号、九頁（学位論文は「淋毒症の転移に就て」（独文）ほか邦文三編。同誌 一八頁）。「京都帝国大学博士論文論題（旧制）」によれば、浅原助教の学位請求論文は以下の四編である。その第一は「二三局処麻酔法（附自家考案緊縛法）ニ就テ 抜書」『東京医学会雑誌』（一五卷、一九号、一～二三頁、明治三四年発表論文の筆記で、提出論文は一頁一行二六字、一二行の縦書き和紙原稿用紙に一行おきに手書きされていて、総頁数は五四頁、付表がある。第二は「腎炎ノ治療法トシテ腎切開術ノ腎穿刺術ノ価値ニ就テ 抜写」（『日本外科学会雑誌』第四回、四三四～四六四頁、明治三六年）。第一と同様な原稿用紙七四枚への書写と彩色顕微鏡絵図からなる。第三は「腎臟結核症ノ外科療法トシテ腎臟切開術ノ応用及ヒ其実験ニ就テ 抜刷」（『東京医学会雑誌』一七卷、一九号、八二七～八七六頁、明治三六年。第四は上記独文論文である。⑯「雑報 人 浅原慎次郎氏（京都医科大学教授）（『医海時報』七九八号、一三七〇頁、明治四二年。⑰「第一三回総会」日本外科学会記念誌編纂小委員会編『日本外科学会一〇〇年誌』八二～八三頁、平成二年。⑱「雑報 鹿兒島辞任」『京都医事衛生誌』一三三三号、三一頁、大正二年。⑲「雑報 人 浅原慎次郎氏（博士）」『医海時報』一〇〇三号、一七四頁、大正二年。⑳千葉医学専門学校校友会編集『校友会雑誌』六四号（大正三年発行）七三～九三頁掲載の「校友会學術部会員名簿」によれば、その住所は「東京市麹町区（現・千代田区）一番町一九」になっている。㉑『日本医籍録』第四版、「附録 医学博士録」四頁、医事時論社、東京、昭和三年。㉒『日本医事年鑑』（『日本医事新報』臨時増刊）八七三頁、日本医事新報社、東京、昭和二年。㉓「医学博士録」文献（一七）㉔『日本医事年鑑』（『日本医事新報』臨時増刊）『医学博士録』二八七頁、日本医事新報社、東京、昭和十三年。
- (18) 「雑報 講座」『京都医事衛生誌』一四六号、三〇頁、明治三九年
- (19) 「雑報 松岡博士、浅原京都医科大学助教」『京都医事衛生誌』一四七号、一二三頁、明治三九年

- (20) 田代義徳 明治二一年帝国大学医科大學卒業。同二四年東京田代病院開設。明治三〇年から同三二一年に第一高等(中)学校医学部(現・千葉大学医学部)で嘱託教員(外科学各論)を勤めた。明治三三年六月、外科的矯正術研究のため独塊へ留学を命じられた。留学中の明治三六年九月に外科学助教に任じられ、明治三七年三月帰朝、同年九月に医学博士を授与され、外科学第二講座担任を命じられた。翌年九月に同第一外科学講座担当も命じられて外科総論を講義した。明治三九年五月九日整形外科学教授に任ぜられたが、陸軍省からの嘱託で、陸軍戸山病院において日露戦争戦傷者の治療に従事したため、講座の発足は同年一〇月になつた。
- ①「第四 職員 嘱託教員」第一高等中学校医学部「第一高等中学校医学部一覽 自明治三〇年 至明治三二年」第一高等中学校医学部、五三頁、明治三二年。②「第五職員 嘱託教員」第一高等中学校医学部一覽 自明治三二年 至明治三二年」五七頁、明治三二年。③「東京帝国大学名誉教授 従三位勲三等 医学博士 田代義徳先生略歴」『蜚光』一二巻、一二号、四二一〜四二二頁、昭和一三年。④蒲原宏「日本整形外科史における田代義徳先生 ―その父たるものの条件―」『整形外科』二六巻、九〇一〜九〇六頁、昭和五〇年
- (21)「勅令第六八号(明治二六年勅令第九三号改正、明治三九年四月四日公布)」「官報」六八二六号、八九頁、明治三九年四月五日発行。この勅令には「外科学三講座」ノ次ニ「整形外科学一講座」ヲ加ヘ」と記してある。
- (22)「第二十五節 整形外科学講座(第五編 医学部 第二章 医学科)」東京大学百年史編集委員会『東京大学医学部百年史 部局史 二二一〇三〜一〇四頁、東京大学出版会、昭和六二年
- (23)「6. 整形外科学講座(第六章 医学部 第二節 講座の発展)」京都大学七十年史中央編集委員会『京都大学七十年史』京都大学七十年史中央編集委員会、五八七〜五八八頁、昭和四二年
- (24)蒲原宏、小林晶、坂口亮、山室隆夫、玉置哲也「日本の整形外科の歴史について(前編)」『日本整形外科学会雑誌』七卷、三七九〜三九〇頁、平成一五年
- (25)松岡道治「千人以上治療シタル畸形患者ニ就テ」『京都医学会雑誌』四卷四号(付録 京都医学会第四次総会誌)、三〇一〜三二頁、明治四〇年
- (26)当時の『大阪毎日新聞』によれば、「去る十八日より教室を開き」「何にせよ規のこととして患者も少く初日は僅かに十名

に過ぎざりしも「我国にては今回東西両大学の医科（東京は田代博士担任）に於て初めて行うこととなりたるもの」と報じている。また菅野弘^②は、「京都医科大学八月（六月）ノ十八日より整形外科学教室ヲ開キ。」と明確に教室の開設を記している。

①大阪毎日新聞 八一七二号、五頁、明治三十九年六月二十日発行。②菅野弘「明治三十九年ニ於ケル京都ノ医事衛生（接一五四号）」『京都医事衛生誌』一六二号、三、四頁、明治四〇年

(27)「雑報 京都医科大学規定改正」『京都医事衛生誌』一四九号、二五頁、明治三十九年

(28)「第一 規程、一 授業、二 試問（第九章 京都医科大学）」『京都帝国大学一覽 從明治三十九年 至明治四〇年』二一七、二二七、明治四〇年

外科学については、このなかで、第四学年の年間を通じて臨床講義（週六時間）、外来患者臨床講義（同六時間）のほか、第二・第三学期（一月～七月）に手術実習を週二時間課している。

大正元年九月にはこれらの規定を一部改正して、眼科、婦人科学及産科学、小兒科学、皮膚科黴毒学、耳鼻咽喉科学、精神科学、整形外科学については、「学生ヲシテ抽選セシメ当籤ノ二科目ニ付試問ヲ施行ス」となった^①。

①「雑報 京都帝国医科大学規定中改正」『京都医事衛生誌』二二二号、三三、三四頁、大正元年

(29) 伊藤弘（いとう・ひろむ）明治一八年七月二九日生れ。明治四三年京都帝国大学医科大学卒業。大正五年八月外科学助

教授に任命され、同八年から二カ年間英国ケンブリッジ大学生理学教室 John Newport Langley 教授（一九二一）〔大正一〇〕年『The Autonomic Nervous System. Part 1』を著す。autonomic nervous system 自律神経系^①の命名者^①の下へ留学し、大正一一年二月六日京都医科大学整形外科学講座教室（第三代）に就任した^①。昭和一三年五月依頼免本官^①。昭和二二年から同三八年まで国立山中病院院長を勤めた（伊藤春子 私信 平成一七年三月三〇日）。昭和五九年一月四日死去。

①文献7（5）

(30) 伊藤弘、天児民和、伊藤鉄夫「京大整形外科の昔を聞く」『臨床整形外科』一一卷、八三、九一頁、昭和五〇年

(31)「第一 学科課程、試験細則（第一〇章 医科大学）」『東京帝国大学編「東京帝国大学一覽 從明治三十九年 至明治四〇年」

東京帝国大学、一二五〜一四一頁、一四八〜一五八頁、明治四〇年

(32) 「附録 京都帝国大学平面図」文献(28)

なおこの平面図に描かれている「整形外科学教室」の建物は、「京都帝国大学一覽 從明治四二年 至明治四三年」(明治四三年)の平面図では「機械療法室」に名称を変え、「外科臨床講義室」は「手術室外科及臨床講義室」となっている。さらに後者は、「京都帝国大学一覽 從明治四四年 至明治四五年」(明治四五年)の「附録 京都帝国大学平面図」では「外科研究室」と称されている。したがって、外科二講座と整形外科学講座、いわゆる外科系三講座一体の「外科研究室」という体制は、早くもこのころまでには確立したものと考えられる。この体制は、昭和二年に建築された外科手術室を含む四階建の「外科研究棟」へ受け継がれた。この外科研究棟は、「臨床系共同実験室 旧外科研究棟」としてツタに覆われ、たまたま、現在なお供用されている。

①「医学部構内の変遷」京都大学広報委員会編『京都大学建築八十年のあゆみ 京都大学歴史的建築物調査報告 京大広報 別刷』六五〜六八頁、昭和五二年

(33) 「京都帝国大学の新事業 医科大学」『京都日出新聞』六八〇七号、二頁、明治三九年五月二日発行。この記事では、整形外科学教室は「機械療法室(整形外科学教室)」と表記されていて、文献(32)で指摘した名称の変更は、当時不自然ではなかったと考えられる。なお、この時点では整形外科学教室の建設地はなお未定であった。

(34) 「京都帝国大学平面図」『京都帝国大学一覽 從明治四一年 至明治四二年』明治四二年

(35) 「京都帝国大学医科大学附属医院本館及病室附属家等之図」『京都帝国大学一覽 從明治三〇年 至明治三二年』明治三三年

(36) 開院当時の京都医科大学附属医院の見聞記には「病舎は第一病舎(外科病舎)第二病舎(内科病舎)に分れ」と記述され、さらに「病舎は各室凡そ三十名総計六十名とすべし」としている。

しかし、建設前の設計図では東側は内科病舎、西側は外科病舎と図示されており、文献(32①)によれば、第一・第三・第五・第七病舎はいずれも内科に属すると記載されていて、文献(34)に描かれている病舎の内部間取りは、奇数病舎は内科系、偶数病舎は外科系の仕様である。また文献(26①)の記事には、「同病舎第九号室を以て該(整形外科)患者の

収容に充(あ)つる由」と書いている。

病舎の収容患者数について『内外医事新報』誌は、猪子附属医院長が「日出新聞」記者への話として、「(開院時は)内、外科室のみにして各六十人(一室は十三人二列、他の一室は十二人二列)、合計百二十人の患者を収容する仕組である」と報じている。なお普通(一般)病室は、今日の体育館のような大きな部屋にベッドを数列も並べるといふ当時の欧米での常識であつたベッド配置ではなく、一室に二列だけベッドを配置した二室を設け、さらに患者が二四時間ベッド上で過ごすことがないように「患者の喫煙談話等を随意になし病苦を忘れしむる」ために静養場(室)を設けている。また「何れの室も玻璃障子(ガラス窓)を用い」るなど、従来みられない新しい施設に仕上げたと述べている。

①「雑報 大学医院開設」『京都医学会雑誌』一四三号、五二五―五二六頁、明治三二年。②「雑報 京都医科大学の設計図」『医海時報』二四七号、一三九頁、明治三二年。③「週報 京都医科大学附属病院」『内外医事新報』四六五号、一〇六八―一〇六九号、明治三二年。④「猪子病院長の談話」『京都日出新聞』四四〇六号、一頁、明治三二年七月二九日発行。

(37) 天児民和「住田正雄教授整形外科を育てた人達(第一〇四回)」『臨床整形外科』二七卷、七〇四―七〇六、平成四年

(天児民和「整形外科を育てた人達」四二〇―四二三頁、九州大学医学部整形外科学教室、福岡市、平成一年)

(38) 小林晶「九州における近代整形外科の祖、住田正雄(一八七八―一九四六)の生涯」『日本医史学会雑誌』四五卷、五六三―五八四頁、平成一年

(39) 「整形外科学講座(第一章 職員 第三 京都医科大学職員)」文献(28)、一六頁

(40) 「整形外科学講座(第三章 職員 第三 京都医科大学職員)」『京都帝国大学一覧 従明治四〇年 自明治四一年』六二頁、明治四一年

(41) 林喜作 明治四〇年、京都帝国大学京都医科大学卒業。明治四一年整形外科講座助手、明治四五年同講師に任命される。松岡先生の宿題報告の独文誌掲載にさいしては、筆頭著者となる。松岡先生退官後は整形外科学教室の運営に携わつた。第二回日本整形外科学会総会では「先天性股関節脱臼」の宿題報告を担当し、東京帝国大学の高木憲次教授と激しく論争したことは有名である。

①「整形外科学講座」(○職員 京都医科大学職員)、『京都帝国大学一覽 從明治四一年 自明治四二年』六九頁、明治四二年。②「雜報 京都医科大学職員異動」、『京都医事衛生誌』二一八号、二九〇頁、明治四五年。③ Hayashi K, Matsuoka M. Bericht über 700 Fälle von Spondylitis Tuberculosa. Zeitschrift für orthopädischen Chirurgie. 30: 381 - 393, 1912。④ 林喜作「先天性股関節脱臼」、『日本整形外科学会雑誌』二卷、一三〇-一四四頁、昭和二年。

(42) 京都医科大学外科学講座は、明治三二年七月三日の勅令三二二号によって、おくべき講座の数を「三講座」に定められたが、同時に「明治三二年九月ヨリ開始スヘキ講座ノ種類及其ノ数」として「外科学二講座」とされた。その後、明治三六年三月三〇日の勅令六八号によって「外科学二講座」制が決定され、さらに明治三九年四月二三日の勅令八九号によって、「整形外科学講座」が創立された。したがって外科二講座の側からすれば、整形外科学講座を外科の「第三講座」といし、末弟⁽¹⁾とみなす気風があつたのかもしれない。ちなみに米国ボストンのマサチューセツツ総合病院(Massachusetts General Hospital)整形外科は、創設後しばらくの間、外科ファミリーのなかで「孤児(orphan)」であつたとさう。⁽¹⁾

① Rowe CR. Ward I and the orthopaedic service; Lest We Forget. 1-6. William L. Bauhan, Publisher, Dublin, NH, 1996.

(43) 「一〇 外科学教室」文献(3) 三二五-三二六頁

(44) 本外科学会総会ならびに日本外科学会雑誌には、京都医科大学外科学教室から以下の報告ならびに論文が発表されている。

- 1、鳥潟隆三⁽¹⁾「洞腹の脊椎骨露出術」(第八回日本外科学会総会、明治四〇年四月)『日本外科学会雑誌』八回、一号、四九頁、明治四一年
- 2、河村叶一⁽²⁾「巨大細胞肉腫ノ手術ニ就テ」(第一〇回日本外科学会総会、明治四一年四月)『日本外科学会雑誌』一〇回、一号、二九頁、明治四二年
- 3、河村叶一「肩胛骨ノ全摘出ニ就テ」(第一〇回日本外科学会総会、明治四一年四月)『日本外科学会雑誌』一〇回、

一号、三七頁、明治四二年

4、河村叶一「巨大細胞肉腫ノ手術ニ就テ」『日本外科学会雑誌』一〇回、二号、一五一、一五四頁、明治四二年

5、河村叶一「肩胛骨ノ全摘出ニ就テ」『日本外科学会雑誌』一〇回、二号、一五五、一六八頁、明治四二年

6、河村叶一「脊髓癆性骨及關節症ニ就テ」(第一一回日本外科学会総会、明治四二年五月)『日本外科学会雑誌』一一回、一号、八〇、八一頁、明治四三年 (Beitrag zur tabischen Osteo-Arthropathie. Deutsche Zeitschrift für Chirurgie. 115:368-406, 1912. なお文献的には、すべし Matsunaka M. Ueber Gelenkerkrankung bei Tabes dorsalis. Deutsche Zeitschrift für Chirurgie. 106:292-300, 1910 が見える)

①鳥潟隆三 明治三七年京都帝国大学卒業。(第一) 外科学講座助手、助教授を経て明治四二年大阪赤十字病院外科医長。明治四四年大阪医学専門学校(現・大阪大学医学部)教諭、明治四五年欧州に学び、その業績を五六〇頁の大篇『Kokopräzipitogene und Kokoinnengenel』(『医海時報』、一一二四号、一七二九頁、大正六年)にまとめ、大正六年帰朝、大正九年京大講師、大正一一年から昭和一三年まで京都帝国大学第一外科学講座教授(7⑤)。②河村叶一(かわむら・きょういち) 明治四〇年京都帝国大学卒業。外科学講座助手を経て大正三年京都府立医学専門学校教諭、大正七年から一カ年欧米留学、大正一二年京都府立医科大学教授(第一外科学講座)、昭和二年辞職し京都市内に河村病院を開設した(遠山光郎「第一外科学教室」(教室及び附属施設史)、京都府立医科大学百年史編集委員会編『京都府立医科大学百年史』四八五、四八九頁、昭和四九年)。

謝 辞

稿を終るにあたって、資料収集にご援助を賜った小林晶・福岡整形外科病院顧問、玉置哲也・和歌山医科大学名誉教授、伊藤春子・故伊藤弘夫人、京都府立医科大学図書館ならびに京都大学整形外科学教室職員各位に深謝する。

**Prof. Michiharu Matsuoka, Founder of the Department
of Orthopaedic Surgery, Kyoto University, and His
Achievements in Orthopaedic Surgery in the Meiji Era of Japan
(Part 1: Establishment of the Department)**

Hayato HIROTANI

The Department of Orthopaedic and Musculoskeletal Surgery, Graduate School of Medicine, Kyoto University (formerly the Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto Medical School, Kyoto Imperial University) was founded by Imperial Ordinance, Article No. 89 issued on April 23, 1906. On May 4, 1906, Dr. Shinichiro Asahara, Assistant Professor of the Department of Surgery, was appointed as the first director of the Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto Medical School, Kyoto Imperial University. Dr. Michiharu Matsuoka, Assistant Doctor of the Department of Surgery, Tokyo Medical School, Imperial University of Tokyo, was appointed as Assistant Professor of Surgery, Kyoto Medical School, Kyoto Imperial University in March 1901. From August 1903 to May 1906, he studied orthopaedic surgery in Germany and returned on May 5, 1906. Dr. Matsuoka was appointed as the director and chief of the Department on May 13, 1906 and took over Dr. Asahara's position. On June 18, 1906, Dr. Matsuoka started his clinic and began giving lectures on orthopaedic surgery. This was the

first department of orthopaedic surgery among the Japanese medical schools. Dr. Matsuoka was appointed as Professor in 1907. He had to overcome several obstacles to establish the medical department of a new discipline that had never existed in Japanese medical schools. This article discusses Dr. Matsuoka's contributions to establishing and developing orthopaedic surgery in Japan in the Meiji-era.